

---

# バカとテストとシヲ少年！？

げんげん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストとショタ少年！？

### 【Nコード】

N8905W

### 【作者名】

げんげん

### 【あらすじ】

バカとテストと召喚獣にオリキャラを出してみました

見た目が小学生の健吾。

そんな健吾が明久たちFクラスのメンバーと一緒に  
学校で大暴れ！？

初めて書くので暖かい目で見てください

## 人物紹介（前書き）

どうも、げんげんと申します。

よろしくお願いします

## 人物紹介

ではさっそくオリキャラ説明から！

榊田 健吾（16）

文月学園に通う高校生。

幼い容姿で、たびたびではなく、ほとんどの確率で小学生に間違えられる。

でも中身はすごく大人・・・ではなく黒い。

でも面倒見はいいため、外見のことがなければ

お兄さん気質

明久、雄二とは悪友。

料理とか得意。

得意科目は理科

苦手科目は国語

所属はFクラス

召喚獣は小学生の制服を着ている。

武器は文房具

腕輪の能力は「急成長」

能力の内容については、本編を読んで確認してください

## 人物紹介（後書き）

とりあえず人物紹介でした

こんな感じで書いていくので

感想 アドバイスなどあったらお願いします

## プロローグ（前書き）

プロローグです

Fクラスのメンバーはまだですが

明久はです

## ブローグ

空を見上げると満開の花びらが、空いっぱいに咲いていた。こんな日でなければ、少しくらいは楽しい気持ちになれたのだろう。しかし、俺にはそんな気持ちにならない理由があった。

それは、この校門をくぐった先にある。

「おい、なんの用だ？つて榊田か。小学生かと思ったぞ」

校門に立っている鉄人―西村先生が笑いながら言う。思わず拳を握るが、鉄人には勝てないことがわかってるので慌てて手を引く。めめる。

「遅刻だぞ。とりあえず、お前にはこれだ」

鉄人に、封筒を渡される。これが俺が今日憂鬱だった理由の根源だ。新学期、誰でも憂鬱になるだろ？

「お前は特別にもう一度振り分け試験をしてもいいんだぞ？」

「いや、こうなった以上はしょうがないっす。それに―」

俺は、校門を目指して走ってくるバカを見る。

「どうせ、あいつも一緒なんですよ？」

「それもそうだな」

明久は息を切らしながら鉄人を見て、それから俺を見た。といって俺の横顔だけだけど。

「あつ！？ 鉄人が小学生に手を！！」

「出してない！ よく見ろ、お前もよく知ってるやつだろうが！！」

「ほえ」

明久がいかにもバカっぽい声を出す。もうこいつを殴ればいいかな？

「あつ、なんだ健吾か」

「健吾か！じゃねえよ」

俺が不機嫌そうな声を出すと明久は顔の前で手を合わせた。

「ごめんごめん、じゃつ鉄人ーじゃなくて西村先生、ください」

明久は鉄人の前に手を出す。いまさら呼び方直してもおそいと思うがな。

「もういい。早く教室に行け。遅刻だぞ」

「はーい（へーい）」

俺と明久は校門へ向かった。隣では明久がうれしそうに封筒を破っている

「なんだお前。ご機嫌だな？」

「だって健吾に勝てると思っただらさ」

「どういうことだよ」

明久はニコニコ顔で俺を見る。

「いや、健吾はFクラスでしょ？ 今回のテストの調子良かったん



だ、僕はきつとDクラスくらいに・・・」

明久の手が止まる。まあこいつが行くクラスなんて決まってるがな。

「健吾、一年よろしく」

若干暗くなった明久の手には、大きくFと書かれた紙が握られている。やっぱりか。

俺は、若干の不安を感じつつ、目の前の無駄にでかい校舎を眺めた・・・。

## ブログ（後書き）

うつ、我ながらの駄文。

がんばって直していきたいと思います。

次回からはFクラスメンバーも出ますので、お楽しみに！

## 第一問 俺と雄二と問題クラス（前書き）

サブタイトルとかタイトルとかそういうネーミングセンスが皆無です

だれかさずけてください。

と、まあこんなもんで、始まりです

## 第一問 俺と雄二と問題クラス

Fクラスの教室についた俺は、教室の見た目を見て唖然とした。ここに来る前に見たAクラスは見た目もきれいだっただけなのに、なんだ？ここは見た目もボロボロ。Aクラスをあんなにするんだったら、その金をここにまわせっつての。

思わずため息をこぼすと、明久がなにやらそわそわしているのに気づいた。どうせ、遅刻したから変な印象を持たれたりとかするんじゃないかと思ってるんだろう。

俺は明久の代わりにFクラスの扉を開けた。

「すいません、遅れましたー」

「早く座れ、うじ虫やる・・・う・・・!？」

「あれ？雄二なんでそんなところにー」

俺の言葉をさえぎって、雄二が教室から飛び出し、俺を廊下に連れ出した。

えらくあせってるが・・・なんだ？

「雄二？どうしたの、慌てて。健吾になにか用？」

「そうだぞ。突然引っぱ張ってきやがって」

明久が驚きながら雄二を見る。雄二は息を整えてから俺を見た。

「健吾、なんでFクラスにいるんだよ！ お前ならAクラスなんて簡単に・・・」

「雄二知らないの？健吾テスト受けてないから」

正確に言えば、受けようとはしたけど、受けさせてくれなかっただ

けどな。

「教師に迷子の小学生と間違えられたんだよ。それで説明が終わった時にはテストが終了してて、無得点扱いってことだ」

今、説明しても腹がたつ。あの教師、新米か知らないが、俺の顔を見るなり

「僕？迷子かな？大丈夫？」

なんて言ってきやがった。説明しても納得しないし。そういえばあいつ見てないな。

「そうなのか・・・。たくつ、なんだってこのクラスに・・・」

雄二が焦ったように言う。こいつがこんなに動揺するのは初めてみたな。

「どうしたの？雄二」

「お前らは今来たから知らないかもしれないが、あのクラス、Fクラスはだいたい問題がある」

「問題？成績とか？」

「それもあるけどな。たとえば秀吉だ」

秀吉？ あいつもFクラスなのか。まあ演劇バカだしな。

「あいつがクラスに入った瞬間大騒ぎだぞ。健吾なんか入ったら・・・」

「入ったら？」

雄二がちらりと俺を見る。なんだか俺を哀れむように見ていた気がするが、あまり気にしないほうがいいのかもしれない。

「良くて誘拐だな」

「悪くてじゃなくて!？」

良くてって、悪かったらなにされるんだ? いや、そうじゃない。平気で誘拐するっていったいどんなクラスなんだよ。

「まあ俺たちもいるしな。平気だろ」

「そうだよ。もしもの時は兄ちゃんたちがーって健吾! 僕の関節はそっちには曲がらなー」

「俺たちがいなくても・・・平気かもしれないな」

明久に関節技をかける俺を見て雄二が言う。誰が兄ちゃんだ! 同年だっつつの!!

だいぶ遅れて教室に入る。どうやらまだ教師は来ていないようだった。俺は雄二と明久の後ろにいるという形で、まだ教室には入っていないが、中はよく見える。畳にちゃぶ台。思わずため息が出るほどの光景だなこれは。

「みんな悪い。少し遅れた」

まずは雄二が教室に入った。図体ばかりでかい雄二がどいたため、さらに視界が開ける。おつ、秀吉もいるけど、ムッツリー二もいるじゃねえか。

「おい、代表、少し質問があるんだが」

代表？ ああ、このクラスの代表が雄二ってことか。雄二の下にくってのはいい気がしねえが、このクラスを動かせるってところなら得かもしんねえな。

にしても、雄二はこのクラスをひどい言い方してたが、今雄二に話しかけたやつみたいにまじめそうな奴もいるじゃねえか。誘拐なんてするわけが・・・

「さっきの少年は誰の弟だ！ なんなら、一日教室に・・・」

「おい、あいつあの子を独り占めする気だぞ！」

「待て！ あの子をひざの上に乗せるのはこの俺だ！」

「なんだと！俺はあの子にお兄ちゃんと呼んでもらいたい」

「俺たちがお兄ちゃんになればいいだろ？」「「「それいいな！」」

」

前言撤回。なんだこいつらは？少々、身の危険が……。いや、むしろ体中に悪寒が・・・。

「健吾ではないか。久しぶりじゃのう」

「・・・久しぶり」

声のするほうを振り返ると、秀吉とムツリーニが立っていた。秀吉は相変わらず・・・女みてえだな。ムツリーニも、ずっと俺と秀吉撮ってるし。

「あれ？どうしたの、二人とも」

「さっき健吾が見えての。前の扉から出てきたのじゃ」

「・・・奴らにばれたら危険」

こいつらは、なんでこんなに慣れるのが早いんだ？

「秀吉は大丈夫だったのか？」

俺が聞くと、秀吉はとたんに暗い顔をした。

「数分であんなに告白されたのは初めてじゃ」

やっぱり秀吉も被害を受けていたらしい。もう、家に帰ってもいいのかな？

「君たち、教室に入りなさい」

声に振り返ると、教師が立っていた。なんか、弱そうだな。こいつ本当に教師か？てか、この様子で教室に入るのは危険だと・・・。

「健吾、僕の後ろにいるんだよ」

「お、おう」

明久の後ろに隠れながら、教室に入る。悔しいが、明久がかべになっているおかげで俺の姿は見えていないらしい。とりあえず近くの席に座る。

「おい、あれさっきの子じゃないか？」

「なに！ 吉井の弟だったのか！」

「じゃあ吉井を倒した奴がお兄ちゃんに・・・」

やっぱり見えていたらしい。そして明久の命に危険が・・・。

「皆さん、静かにしてください」

教師の声が聞こえる。一瞬はその声で静かになるも、ひそひそ声は



止まらない

「でも、制服着てるぞ」

「つてことは高校生なのか？」

「いや、カモフラージュかもしれない」

「吉井が心配でついてきたのかもしれないぞ」

「「「けなげだなあ」」」

なんだかあらぬ誤解を受けている気がする。

「よろしく頼むぞい」

秀吉の言葉で初めて気がついた。どうやらすでに自己紹介が始まっていたようだ。

「・・・土屋 康太」

おつ、次はムツツリー二か。じゃあ次は・・・あれ？あいつどっかで覚えが。

俺の視線の先にはこのクラス唯一とも言える女子生徒が座っていた。あのポニーテール、覚えがあるな。

「趣味は、吉井を殴ることと、健吾のお守りをする事です」

こんな迷惑な趣味をもつ女はあいつしかない。島田 美波。あのやろう。Fクラスだったのか。俺と明久に向かって手振りやがって女子だからっていつまでも何も思わないと思うなよ。

明久の前の奴が話し終わり、明久が立ち上がった瞬間――

「すみません！ 遅れちゃいました！」

見覚えのある、ここには似合わないあいつが入ってきた。

**第一問 俺と雄二と問題クラス（後書き）**

なんだか数人空気が．．．．．

まあ気にしないでいきましょう

**第三問 俺と姫路と自己紹介（前書き）**

やっぱりサブタイが・・・。

誰かネーミングセンスをプリーズミ

とりあえず、姫路さんが出てきます。

### 第三問 俺と姫路と自己紹介

扉を勢いよく開けてはいってきたのはこのクラスに似合わないあの女。Aクラス確実とされた姫路 瑞希だった。

「姫路さん。自己紹介の途中ですので、好きな席に座ってください」  
「はい」

姫路は若干息を荒くしながら席につく。遅れそうだからって走ってきたんだろう。

「よ、吉井 明久です」

明久が姫路のことを気にしながら自己紹介を始める。

今、低い声でダーリンとか聞こえたが、聞き間違いだよな。きつと。

明久が座るのを確認すると今度は俺の番だ。立ち上がると妙な歓声があがる。

「あの子だぞ」

「本当だ。ちゃんと自己紹介できるのか？」 「がんばれ、お兄ちゃんたちは見てるぞ」

お前らみたいな兄を持ったことはない。

「えつと榊田 健吾だ。言っとくけど同じ歳だからな」

兄ちゃんとか言って騒いでたやつをじろりと見る。座るとまた話し声が聞こえてきた。

「えらいぞ、よく一人でできたな」

「えらいえらい」

なんかまだ子供扱いされてる気が……。いっぺんあいつらしめるか？

「なんでこんなところにいるんですか？」

突然の質問に周りを見る。もう話してから時間は経ってるし、俺に向けてじゃないことは確かだが……

誰だ？あんな失礼きわまりない質問をする奴は。質問されているやつは相当の嫌われ者か、有名人だな。

「えっと、それは……」

質問を受けていたのは姫路だった。どうやら俺の次だったようだ。な。つてことは理由は後者つてことか。

まあ姫路は有名だし、疑問に思っても仕方がないが……。結構騒ぎになってたと思うがな。こいつらはテスト中に寝てたのか？その後も噂になってたぞ。

「テスト中に熱が出て途中でやめたんだよ。無得点扱いってやつだ」

別にそんな義理もないが、助け舟をだしてやる。まあ無得点扱いってところは俺も一緒だしな。

「榊田……くん？」

突然の俺の声に姫路が目を丸くする。さっきから何も言わないとは思っていたが、まさか今、俺の存在に気づいたとか言うんじゃないだろうな。って、明久の影になって見えなかったのか。

「俺も無得点。まあ引き分けだな」

「健吾？引き分けって？」

明久がきよとした顔で聞いてくる。あれ？俺、こいつと一年間悪さしてなかったか？じゃあ知ってるはずだと……。

「明久、健吾は姫路と学年トップを争ってたんだ。お前だって知ってるはずだろ？」

「え？ ああ、そんな噂もあつたっけ？」

噂じゃねえ。事実だ。あと、争っては無い。周りが囁し立てただけだ。まあそれに乗った俺も原因はあると思うけど。

「よ、吉井くん！？」

姫路がさらに目を丸くする。って、俺の存在に気づかなかったのは仕方がないが、明久にも気づいてなかったのかよ！ こいつ、ただけ周りを見てないんだ？

「こんにちは姫路さん。身体の具合は「おい、姫路。もう身体は平気なのか？」……」

明久の言葉に雄二の言葉が重なる。ああ、明久が分かりやすく落ち込んでいる。ここまですると不憫だな。

「そこの人達、静かにしてくださいね」

教師が教卓をとんと叩いた。その瞬間、教卓がバラバラに崩れる。って、どんだけボロボロなんだよ！この教室は！！

「ちよつと替えを取ってきます」

教師が、教室を出る。さすがに教卓の替えはあるのか。またボロボロじゃないだろうな。

そんなことを考えているうちに、明久と雄二が廊下に出る。大方、姫路のことだろう。

明久の性格を考えりゃ、予想もできる。

「あ、あれ？ 吉井くん、まだ授業は終わってないですよ？」

姫路が廊下に出ようと立ち上がる。たくつ、こいつもおっせかいだな。まあ自分のことで話し合っているとは夢にも思っていないんだろうけど。明久のためにもとりあえずとめとくか。

「おい、姫路。ほつといてやれ」

「どうしてですか？」

「男にはいろいろあるんだよ。それに、そろそろ戻る」

「へ？」

明久と雄二が教室に入ってくる。ついでに教師もよたよたと教卓を運びながら教室に入ってきた。

「坂本くん、自己紹介がまだでしたね。あなたが最後です」

教師の言葉に雄二はどこか決意をこめたような表情で立ち上がった。こいつがこいつという顔をするときは、なにかおもしろいことをしてく



れるんだよな。

雄二が教卓の前に立つ。

「Fクラス代表、坂本 雄二だ。ところで、皆に一つ聞きたい」

雄二が、教室をゆっくりと見渡す。それにつられて何人かの生徒も教室を見渡す。これは相手を引き込みやすくするための雄二の技。交渉術では俺も雄二に勝てない。

「皆、不満はないか？」

「「「大ありじゃあああああ！！」」」

クラスが沸き立つ。まあこんなボロボロ設備じゃあ、嫌気も差すわな。せめて畳じゃない床にしてもらいたかったよ、俺は。

「そこで提案なんだが・・・」

雄二の言葉にクラスがしんつとなる。

「Aクラスに試験召喚戦争をしかけてみないか？」

雄二の言葉にさつきとは違ったざわめきが起こる。

「勝てるわけがない」

「そうだ、これ以上レベルを落とされるのも嫌だ」

「女子三人と弟一人がいるんだ、もう十分だ」

一人、意味の分からないやつもいるが、確かにそうだ。Fクラスはバカの集まり。頭のいいAクラスに勝負を仕掛けようなんて、どうかしてるとしか思えない。

というか、もしかして弟って俺のことじゃないだろうな。

「いいか？ このクラスにはAクラスに勝てるほどの人材がそろっているんだぞ？」

「それはどういうことだ？」

「いいか、まずは康太だ。おい、健吾を撮ってないでこっちにこい」  
ムツリーニが俺の後ろからぶんぶん顔振って、前に出る。つて、まさかこいつ、俺の写真売りさばくつもりじゃ……。去年もやられたからな。どうせ撮られるなら、撮影料でも請求しとくか。

「こいつはかの有名な寡黙なる性識者だ。」  
ムツリーニ

「なに！？ あいつが！」

「でもあいつ、建ちゃんもそうだが、秀吉のことも撮っていた」

「ということは本物か！？」

次々と声があがる。てか誰だ、俺のこと建ちゃんなんて言ってるやつは。

「次に、姫路と健吾だ。」

クラスの視線が俺と姫路に向けられる。姫路はなにを言っているのかさっぱりという顔で雄二のことを見ていた。

「姫路は、有名だから皆實力は知っているな。そして健吾、こいつは姫路と同じくらいの学力を持っている。」

「なんだと。あのちびっ子がか！？」

「そうかそうか。兄ちゃんは鼻が高いぞ」

だから誰だよ！？さつきから勝手に兄面してるやつは。あと、こういうときは「兄ちゃん」

じゃなくて「義兄ちゃん」な。って、どっちも認めるか！

「そして、秀吉。俺も力にはなれる」

「あいつは、姉がAクラスの・・・！」

「坂本も確か昔神童と呼ばれてたとか」

「もしかしたら本当にいけるんじゃないか!？」

クラスの土気があがる。まあさすが雄二だな。

「最後に、明久だっている」

ー シーン ー

やっぱり、雄二のやつ、明久をおちに使ったか。

「誰だ？そいつ」

「あいつだよ。ダーリン」

「ああ、ダーリンか」

「やめてえ、ダーリンって呼ばないでえ!!」

明久が叫ぶ。まあ女子ならまだしも男子に言われりやあな。でも明久、これは自業自得だ。

「明久は観察処分者だ。まあ、健吾もだがな」

クラスがざわめく。

「観察処分者って確か・・・バカの代名詞だったよな」

それには一部、間違いがあるが、概ねあってるな。

「待て、それでは健吾がかわいそうだな。観察処分者は・・・いわば問題児につけられる称号だな」

雄二がフォローを入れる。

「ち、ちよっと、僕は？僕はかわいそうじゃないの！？」

明久の嘆きが聞こえるが、無視だ。俺も、お前と一緒にされたくはない。

「こいつらの利点は・・・そうだな。召喚獣が自由に動かせる」

そう、雑用とかやらされるからな。そこらへんのやつらよりは細かい動きになれているところがある。そのかわり、フィードバックもあるがな。

「ちよっと待て。でもダメージが自分に返ってくるだろう？そんな簡単に召喚できないんじゃないのか？」

「そうだ！ 建ちゃんに危ないことはさせられん！」

「やっぱりその話には乗れない！！」

さっきまでの土気が嘘のように下がっていく。これには雄二もおてあげのようだった。

雄二、そもそもこうなったのは明久の名前を挙げたお前のせいなんじゃ・・・。

（おい、健吾、このままじゃやばい。力を貸してくれ）

雄二が小声でいう。

（なっ、俺にあれをやれっていうのか！？）（頼む。あいつのために）

雄二が明久を見る。明久は慌ててクラスの連中をなだめていた。確かに、あいつは姫路のためにやってるんだもんな。仕方ない。

（雄二、借りは返せよ）

（おう、すまん）

俺はクラスの連中の前まで歩くと、できるだけ多くのやつに聞こえるように言う。

「僕・・・信じてるよ。僕になにかあってもお兄ちゃんたちが助けしてくれるって。だから・・・」

少し、俯く。

「やろうよ。僕、お兄ちゃんたちの活躍、見たいな」

できる限りの上目使い。これはある意味での俺の交渉術だ。って、反応が薄いな。もしかして失敗か？

「「「YES！マイブラザー！！」」」

どうやら、効くまでに時間がかかったらしい。でも士気は再びあがったようだ。でも、誰がブラザーだ。

「よしっ、お前ら！！ ペンをとれ！ まずはDクラスから攻め落とすぞ！！」

「「「おー!!!」」」

こうして俺たちの試験召喚戦争は始まった。

### 第三問 俺と姫路と自己紹介（後書き）

文字数がよく分からない。

自分ではめっさ書いているつもりなのですが・・・。

どのくらいがいいんですかね。

小説って書くの難しいですねえ。

このサイトで小説書いてる人たちを尊敬します。

## 姫路と俺と忘れかけのトラウマ（前書き）

なんだか毎日更新してますね

それくらい暇なんですよ休日って

てなわけではじめます



## 姫路と俺と忘れかけのトラウマ

試験召喚戦争を始めるにはまず、対象クラスに戦線布告をしなければいけない。

問題はその使者だが・・・。

「明久、お前、Dクラスに行つて、戦線布告して来い」

雄二の指名により、明久が使者となった。

「でも、ひどい目にあつたりとかしないの」

「平気だ。Dクラスは安全だ」

「本当？」

「ああ。俺は友人をだますようなことはしない。」

「分かつた、行つてくるよ」

明久が意気揚々と教室を出て行く。雄二はこう見えても仲間思いのいいやつだ。確かに友人をだますようなまねはしない。友人は。

・・・数分後・・・

「ひ、ひどい目にあつた」

明久がボロボロで帰ってきた。そう、雄二は友人をだますようなまねはしないが、駒は平気でだます。これが戦場では必要なことだ。

「ちょっと雄「よしっ、これでひと段落だな」」

「ねえ雄「今から、飯でも行くか」」

「雄二!!」」

「なんだよさつきから」

あつ、聞こえてたのか。うまいことスルーしてたからてつきり聞こえてないのかと思ってた。

「雄二！僕をだましたな！」

「いいか明久。戦争に犠牲はつきものだ」

「だからって僕を犠牲にするな！！」

「悪い悪い。代わりに昼飯おごってやるから、機嫌直せ」

「えっ？本当。ラッキー」

明久、前から思ってたけど切り替えが早いな・・・。

「昨日から塩と水だったからなあ。栄養をしっかりと取っておこう」

「そうじゃなくて毎日栄養は取れ」

「だってー お金ないし」

明久のせいだけだな。

「吉井くん、よければ明日、お弁当作ってきましようか？」

「えっ、本当？」

「よかったな。明久。栄養がとれる上に女子の手作りだぞ」

手作り……。姫路の……。もしかしてこれは止めたほうがいいのか？

「ふーん。瑞希、優しいのね」

島田が不機嫌そうに言う。いや、優しいというよりもこれはおせっかいだろ。

「よければ皆さんの分も作りますよ?」

余計なことを。明日は死んでも弁当を持って来よう。でないと死ぬ。

「本当か?」

「・・・うれしい」

「ではお言葉に甘えようかの」

なにも知らない奴らが。もしかしたら止めるよりも身をもって分かったらどうが、こいつらのためにはなるのかも知れない。うん、すぐに処置をすれば死なないし。

「榊田くんはどうですか? またクッキーを持ってみようか?」

「また? どういうことだ姫路」

ク、クッキー……。あの殺人兵器のことか?

「榊田くんのことを昔、小さな子と勘違いしたことがありまして・・・。そのときに持っていたクッキーをあげたんです。」

忘れかけていた記憶がよみがえる。教室で一人寝ていたら、あいつがやってきて、

「迷子ですか? 先生を呼んできますから。これ、食べて待っていてください」

なんていいやつだった。ああ、思い出すだけで震えが・・・。

「なんだ、そういうことか・・・って健吾、どうした?」

「すごい震えてるよ？」

「ナンデモナイヨ。ヘイキダヨ。オニイチャンタチ」

「雄二大変だ！健吾が壊れた！」

「ほ、保健室だ保健室！」

雄二と明久に連れられ保健室へと連行される。忘れかけていたトラウマだったのに。

あの後、クッキーを見るだけで震えが止まらなかったぞ。

「そういえば、あの日から榊田くん、私の顔をみるだけでああなっていました。」

先生を連れてきたときにぐっすり眠っていたから、そのときに悪い夢でも見たんでしょうか」

教室を出る直前、そんな姫路のつぶやきが聞こえた気がした。

## 姫路と俺と忘れかけのトラウマ（後書き）

なんかちょこちょこ色んなキャラが空気になってますね。

危ない危ない。

さて、あとがきのネタもなくなってきたところで小話を一つ。

実は、健吾と同じく、自分も小学生に間違えられることがよくあります。

高学年くらいになら間違えられても仕方ないですが、

明らかに低学年から中学年、1〜4年生あたりに間違えられている気がします

旅行先のみやげ物屋で買い物をするとき「一人で買えてえらいねえ」

といわれます。別に不安な顔をしていたわけではありません。

というか、自分も高校生です！買い物くらい一人でできます！！

てか、何回も買いに行ってます！！

しかも、ボクって言われるんですよ！？

ボクじゃないし！！そこはお兄ちゃんって言ってください！！

原因はなんでしょう？服装・・・ですかね？

うん、服装だ！そういうことにおこう！

ってわけで次回予告ー

次回からできれば試験召喚戦争にいきたいですね。

まあがんばります

## 俺と姫路と教室での出来事（前書き）

今回は瑞希、健吾、雄二が中心になりそうですね。

## 俺と姫路と教室での出来事

「おい、こっちの隊は全滅だ。応援頼む！」

「こっちもだ！ 点数補充の時間をくれ！」

教室に数人が駆け込んでくる。今は試験召喚戦争の真っ最中だ。俺と姫路は雄二の命令で教室待機。どうやらできるかぎり俺と姫路の存在を知らせたくないらしい。

「俺たちはなにもしなくていいのか？本当に」

「ああ。明久もいるしな。できればお前らは使いたくない」

横に座っている雄二が言う。こいつもなんだかんだで明久のことを信頼してんだな。

「ぬう。疲れたのじゃ」

秀吉がフラフラになりながら入ってくる。どうやら戦死はしてないようだが、点数はだいぶ削れているみたいだな。

「秀吉、どうなってる？」

「はつきり言ってぎりぎりじゃな。明久もがんばってる」

ぎりぎりか。まだAクラスとも戦ってないのにこのままで平気なのか？

「離しなさい！絶対に殺してやるんだからあ！」

なにか物騒なことを言いながら、島田が入ってくる。島田を連れて



いるのは・・・誰だっけ？

「おい、どうした島田」

「吉井の奴。絶対に殺してやるう」

ダメだ。全然聞こえてないらしい。

「健吾、島田を止められるか？」

「まあ」

絶対に使いたくない手をやることになるがな。

「なら頼む。この島田を冷静にしてやってくれ」

雄二の言葉に若干のため息をつく。確かに島田の力は必要かも知れないが、明久がらみなら別にいいんじゃないか？

なんて考えつつ、島田の前に行く。島田は未だに我を失っているようで叫びまくっていた。

「お姉ちゃん、怖いよ？ どうしたの？」

島田の制服の裾をくいくいと引っ張る。島田は我に帰り俺を見る。もう一押しだな。

「僕、僕ね。優しいお姉ちゃんがいいな」

笑顔でそういうと島田の目に光が戻っていくのが分かった。

「うん！ごめんね！」

島田が俺を抱きしめ、ぐるぐると振り回す。目が回って気持ち悪い。

「島田。戻ったら試験を受けてくれ」

「あっ、うん」

島田が机に向かう。雄二はなにか考え事をしているようだ。俺と同じことを考えているんだろうけどいい打開策が見つからないようだ。珍しい。

「雄二、どうやって時間を稼ぐ？」

「そうだな・・・、あっ！」

雄二が俺を見てなにかをひらめいた様な顔をする。その顔がこいつは悪巧みを考えた時の顔。嫌な予感しかない。そしてその予感は恐らく現実となるんだろうと、安易に想像できた。

試験召喚戦争の様子はそれはひどいものだった。ひどいっつっても、鉄人に連れていかれるクラスメイトたちの嘆きがひどいだけだな。

「戦死者は補習ー！！」

「やーめーてー」

あっ、また一人補習室行きになった。俺もそろそろ動こうかと腹をくくる。

すると、それを待っていたかのように、放送が鳴った。

ーピンポンパンポーナー

「校内にいる皆様にお願ひです。校内で小学生が迷子になりました。

見つけ次第、職員室までお願いします」

ーピンポンパンポーンー

放送が終了する。当然誰も迷子になっちゃいない。これは雄二が放送した偽の放送であり、俺への開始の合図だ。若干気は乗らないが、仕方が無い。

ため息をつく、ちょうどDクラスの生徒が出てくる。さすが雄二、やっぱりここが一番Dクラスが多いようだな。

俺はゆつくりとその集団に近づく。もちろん、うつむき、演技をしながら。

「う、うえーん。ここどこお」

「ん？ あつ、この子放送の！？ おい、皆、ちょっと来てくれ！」

一人の合図でそろそろとDクラスの生徒がやってくる。

「お、おい。大丈夫か？」

一人が話しかけてくる。命令だとできるだけ連れ出せ、だったな。もう少しだけやってみるか。

「うつ、ひくつ、うわーん」

俺の声でまた何人かが現れる。このぐらいかな。

「僕？ 大丈夫だからねえ」

一人が俺に近づく。どいつもこいつもガキ扱いしやがって……  
！



どこかで歓声が上がる。無事、姫路を代表のもとまで誘導できたらしいな。こりゃ、時間かせぎしたかいがあるってもんだ。

さてと、教室に戻るとするかな。

「あつ！ あなたね！？ 迷子の小学生はっ！」

「はぁ？」

どこからか教師が現れる。確かこいつは・・・えっと。高・・・そうだ！高橋だ！どうしてこんなところに・・・？

「もう安心よ？ さっ、お姉さんと一緒に行きましょうね」

手を捕まれ、引っ張られる。こいつ力強っ！てかお姉さんじゃなくておばさんだろ！！

「お、俺は小学生じゃ・・・」

「はいはい。行きますよー」

全然話し聞いてない！？ ちよっ、誰か助けー

うわああああああああ・・・

そして俺は、職員室で誤解を解くまで監禁されるのであった。

## 俺と姫路と教室での出来事（後書き）

さてさて、やっと始めました試験召喚戦争。

これからどうなりますことやら・・・。

てなわけで、これからの更新についてです

ここ何日かはなにも考えず更新しまくっていたわけですが・・・

話のストックがなくなりました。

そうですよ！自分は夏休みとか遊びまくって宿題を忘れるタイプですよ！！

てなわけで毎日更新はできなくなりましたーwww

てかなんで今まで毎日更新できていたのか、いまだに不思議です

きつと、テンションあがって書きまくってただけでしょうがね。

でも、最初の宣言通り、週に一回は必ず、更新いたします。

ではまた次回ー

## 姫路と明久の秘密会議（前書き）

最近やっとここに慣れてきました。

他のことを書く余裕も出てきましたよー

唐笠さん、俺がベジータだー！さん、神夜 晶さん

感想どうもありがとうございます。

嬉しくて小躍りしていたら親に変な目で見られましたwww

## 姫路と明久の秘密会議

職員室での俺の決死の説明は約一時間にも渡った。たくつ、鉄人がいなかったら俺はどこかの小学校に連れていかれてたぞ。ここの制服だつて着てたのに、気づけよな。

ふう、とため息をつく。そんなことをしている間にすっかり放課後だ。明久たちはもう帰っただろうなあ……。

憂鬱な気持ちで教室に入ろうとすると、中で話し声が聞こえた。

「……にくつ……」

「私の友達も……」

「……肝臓とか……」

内容まではよく分からないが、声は明久と姫路で違いない。そして明久の持っている封筒のようなもの……。まさか！

「おい」

「!？」

後ろから声をかけられ、驚いて振り返る。そこには雄二の姿があった。

「雄二、大変だ！」

「ああ。とうとう明久にも春が「明久が女子と焼肉を食べにいく」としてぞ！」はあ？

「にく」とか、「肝臓」とか単語しか出ていなかったが、あれはお



そらく焼肉の話だ。そしてあの封筒。おそらくあれは割引券かなにかだ。

そして姫路の「私の友達」というのは一緒に行く面子のことだろう。おそらく、焼肉屋の割引券か招待券をもらったが、女子だけだとたくさんは食べられない。そこであまりちゃんとした食事をしていない明久も一緒にどうだ、と誘っていたのだろう。畜生、明久めえ……。

「お前、明久並だな」

「はあ？なにがだよ」

明久と同じにはしてもらいたくない。

「いや、なんでもない。お前のカバンは俺が持つてる。帰るぞ」

雄二は哀れむような視線を俺に向けたあと、玄関に向かっていった。俺も急いで雄二を追いかける。

帰り道に聞いたのだが、どうやらクラスの設定は変えなかったらしい。雄二のことだ、なにか作線があるんだろう。

それにしても焼肉か……。あつ、今日の夕飯は豚のしょうが焼きにしよう。

（こうして健吾の勘違したまま、朝を迎えるのであった……。）

## 姫路と明久の秘密会議（後書き）

なんだか他のことキャラが空気の気が．．．．．

どうにか他のキャラの活躍も書きたいなと

思います!!

## バカテスト1（前書き）

神夜 晶さん、感想ありがとうございます

今回は本編の合間の休憩タイムー

（作者の）

はじまりはじまりー

## バカテスト1

問 以下の意味をもつことわざを答えなさい。

「(1)得意なことでも失敗してしまうこと」

「(2)悪いことがあった上に更に悪いことが起きるたとえ」

姫路瑞希の答え

「(1) 弘法も筆の誤り」

教師のコメント

「正解です。他にも「河童の川流れ」や「猿も木から落ちる」などがありますね」

榊田健吾の答え

「(2) 泣きつ面に蜂」

教師のコメント

「たいへんよくできました。むずかしいかんじがよくかけましたね」

・・・テスト返却後の感想・・・

健吾「なんで俺だけひらがななんだよ」

明久「すごいね健吾。蜂なんて漢字で書けたんだ!」

健吾「お前までガキ扱いかよ!!」

問 以下の英文を訳しなさい。(榊田くんは除く)

「this is bookshelf that  
and mother had used regularly」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

「正解です。よく勉強していますね」

榊田健吾の質問

「なんで俺だけやらなくていいんですか?」

教師の答え

「きみにえいごはまだはやいです」

榊田健吾の答え

「早くないし、漢字ちゃんと読めますから!!」

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

「訳せたのはthisだけですか」

吉井明久の答え

「\*?@」

教師のコメント

「できれば地球上の言語で」

・・・テスト返却後の感想・・・

明久「いやあ、まったくわからなかったよ。姫路さんはすごいなあ」

瑞希「そ、そんなことないです」

明久「いや、すごいって。ってあれ、健吾どうしたの？静かだね」

健吾「・・・たい」

明久「ん？」

健吾「俺も普通にテストに答えたいー！！！」

## バカテスト1（後書き）

自分で見直していて思ったこと！

ギャグセないですね。自分。

でも今からでも遅くない！！

頑張って磨きます

って、どうやれば磨けるんだろ。

姫路と弁当と殺人未遂（前書き）

神夜 晶さん、感想ありがとうございます

てなわけで続きます



## 姫路と弁当と殺人未遂

翌朝、俺はいつも通りに学校へ向かう。

教室にはすでに明久たちが待機していた。

ふと明久を観察する。なんだかいつもと変わらない。恐らくまだ明久は焼肉を食べてないんだろう。

女子と一緒にっていうのは少々うらやましいが……いや、そうでもないか。

まあ早くこいつには栄養をとってもらいたいもんだな。

「どうしたの健吾。僕の顔になんかついてる？」

「いや別に。そっぴやあ雄二。俺も補充試験は受けたほうがいいか？」

「おう。姫路もな。できれば点をあげてもらいたい」

「おう（はい）」

前回の補充試験は、急いでたのもあったからな。時間さえあれば点はとれる。

……こうして俺たちは補充試験を受けた。

補充試験が終わった時、時間はすでに昼になっていた。どうりで腹もすくわけだ。

「よし、飯でも食うか」

「じゃあ食堂でも行くか？」

「そうだね。あまり物もらえるかもしれないし」

弁当わけてやるからそういうことを言うな明久。

「あ、あの」

おずおずといった感じで声が聞こえる。

「お弁当、作って来たんですけど・・・」

死神の声が聞こえる。姫路、お前が持っているのは凶器か？

「姫路、本当に作ってきたのか？」

「ありがとう姫路さん。さっ、屋上に行こう！」

明久が意気揚々と屋上に向かう。弁当、作ってきてよかったなあ。AEDがあつたら借りて行こう。

俺は明久たちの命の安全を心配しつつ、屋上へと向かった。

・・・そして今、俺の目の前には地獄絵図が広がっている。まさか秀吉やムツツリー二もくたばるとは。

「吉井くんたちどうしたんでしょう」

「食い過ぎだよ。男はよくある」

「そうなの？ でもウチの分まで食べなくても・・・」

「島田は俺のを食べ。あつてもその前に飲み物頼んでいいか？」

「いいわよ。なにがいい」

「なんでもいい。姫路も頼む。明久たちの分をな」

「はい！」

姫路と島田が屋上から出る。よしっ、邪魔者はいなくなった。

「んじゃさっそく」

俺はAEDを手取る。まずは雄二だ。こいつは脈がない。

「戻ってこーい！！」

電気ショックを一度当てる。

「ん？　ここは・・・」

なんという生命力。もう戻ってきたか。

「雄二、平気か？」

「ああ。ところで健吾、姫路のあれは素か？  
俺たちに恨みを持っているんじゃないか？」

あの殺人料理が冗談だったらよかったのに。

「あれは本気だよ」

「そ、そうか」

俺の遠い目に気づいたのか、雄二はなんにも言わず俯く。この苦しみは一度経験しないとわからない。雄二、俺たちは同士だ。

そこで気絶している奴らも。って、そろそろ起こしたほうがいいかな。

「雄二、手伝ってくれ」

「おう」

雄二と一緒に残りを起こす。こいつらはどうにか気絶していただけた。ようやく簡単に目を覚ました。

「む？ 僕はいたい」

「ひどい目にあつたのじゃ」

「．．．．．死ぬかと思った」

どうやら三人に後遺症はないようだ。

「健吾、姫路さんたちは？」

「飲み物を買に行ってる。お前らはこれを食べ」

こんなこともあるつかと用意していたおにぎりを渡す。まあはつきり言つと俺の非常食だったが、こいつらのほうが必要だろ。

「わーい。ありがとう。おいしいー」

「うむ。なかなかいけるのう」

「．．．．．なつかしい味がする」

「お袋の味つてやつだな」

ただ白米を握っただけだがな。なんだかここまで言われると照れる。

「あつ！ ちよと、ウチらがいない間に！」

「皆さん、ジューズです」

島田と姫路が帰ってくる。姫路の手に缶しかないのを見ると、もうあの兵器は持ってないだろう。

こうして波乱の昼休みは終わった。ちなみに俺の弁当を食べた島田と姫路が

「もつと頑張らなくちゃ」

と言っていたのは聞かなかったことにしておこう。島田はまだしも  
姫路に頑張られると  
死亡者が増える。

## 姫路と弁当と殺人未遂（後書き）

はい、てなわけでなかなかAクラス編に行けない・・・

一気にはぱつとアイデアが欲しいものです

俺とカバンと壊された日常（前書き）

テストオワタアアアア！！

二重の意味で

昨日はたくさんあそびました。

てなわけで次話とーこー

## 俺とカバンと壊された日常

「人通りの多い廊下と焦ったような声。」

今は試験召喚戦争の真っ最中だ。当然、相手はBクラス。てなわけで俺も戦闘に出ている。

「健吾！ そっちに行っ たよ」

「おう。試験<sup>サモン</sup>召喚」

明久の合図で召喚獣を出す。フィールドには小さな俺の召喚獣が出てくる。鉛筆を持ってちょこんと立つその姿になんだか腹がたつ。

召喚獣まで俺を子供扱いしてるんじゃないだろうな。

「ちょっとあんな小さい子と戦うの？」

相手は女。それならこっちのものだ。

「う、ごめんね」

女が攻撃を仕掛ける。その攻撃をよけず

ダメージがすくなくところに当たるようにする。まあ、大分点差はあるから、どこに当たってもたいしたことにはならないだろうけど。

「痛い！」

「え！？」

召喚獣に攻撃をしたはずなのに痛がる俺に相手は動揺する。



「痛いよう。僕、観察処分者だから、ダメージが」

涙目で相手を見る。ちなみにこの涙はあくびだ。

うずくまる俺に相手は攻撃をとめる

「そ、そうなの？」

「うん。痛い、痛いよお」

「ご、ごめんね。大丈夫？」

「うん。平気。お姉ちゃんも謝らないで。これは戦争なんですよ？  
僕我慢するから」

立ち上がり笑顔を向ける。相手は辛い顔をして俺を見た。

「じゃ、じゃあ、ごめんね」

「ひい」

俺の召喚獣にまた攻撃がきそうになる。そこで俺はとっさにしゃがみこんだ。

「あつ……………」

相手の召喚獣の動きが鈍くなる。

その隙を待っていた。

「えっ」

俺の召喚獣が鉛筆を振り下ろす。芯の部分が相手の召喚獣に刺さると、相手の点数は0になる。

「わーい！ 勝てた勝てた！」

わざとらしくぴょんぴょんはねる。こうしないと疑問を持たれて終わりだからな。まあ、敵は倒しまくってるけど。

「よかったね。じゃあね」

鉄人に連れていかれるその後ろ姿を見守る。  
心理戦も一つの戦法だから勘弁してくれよ。

「健吾、明久。ちょっとよいか？」

秀吉に呼ばれ、一時休戦。といっても俺のそこにはもう敵は来ないみてえだし別に支障はない。

「で、どうした」

「Bクラス代表、根本のことじゃが……」

どうやら秀吉のはなしだとBクラス代表の根本 恭二は、性格の悪さに評判があるらしい。

勝つためならどんな卑怯な手も使うそうだ。

「雄二が心配だ。戻ってみるか」

教室に雄二一人を残すのは危険かもしれない。まあ、あいつのことだしたかったことはないだろうけど用心にこしたことはないだろう。俺たちは急いで教室へと向かった。

「なんだよこれ」

「ひどい……………」  
「やられたのう」

教室に戻った俺たちを待っていたのは、無残なちゃぶ台と、ボロボロになった筆記用具だった。雄二が留守にしている間にこんなことを……………なんてやつだ根本。

「ところで雄二はどうして留守にしていたのじゃ？」

「向こうから協定の申し出があつてな。調印に行っていた」

「協定？」

「ああ。今日の四時までに決着がつかない場合は明日へ持ち越し。その間の戦争に関する行為は一切禁止するって内容だ」

そんな俺たちの得しかないような協定をなぜ？しかもこうやって簡単に点数の回復をさせないようにするってことは明日に持ち越すってことだ。そうすれば俺たちのほうが有利になる。ということは根本のやつなにか作戦が……………？

「うわっ、健吾。見てこれ」

明久が俺のカバンを指差す。

「！？」

そこにはボロボロになった俺の筆記用具。

そしてボロボロのカバン。その代わり程度に置かれたランドセル。

野郎……………。

「こりゃ修復不可能だな」

雄二もそれを眺めながら言う。

えっ、修復不可能？そ、それって

「やばい」

「へ？」

俺のつぶやきに明久が反応する。

「どうしたの健吾。他のものは無事なのに……」

「ああ。他のものはな。問題はそれじゃねえよ」

「??？」

そう。問題はなにが残ったかではなく、なにが壊されたか、だ。

やばい。むしろこれは大問題だ。

「け、健吾」

「あーあ。明日からお先真っ暗じゃねえか。根本の野郎。絶対にー」

叩き潰す。

俺の平穏を壊した代償。きっちりと払ってもらっぜ？

根本くん。

## 俺とカバンと壊された日常（後書き）

今、ハロウィンにむけて短編を制作中です。

でもそのためにはAクラス戦を終わらせるなくては・・・

あともうすぐだ！頑張れ俺！！

姫路と根本と奪われた手紙（前書き）

唐笠さん、感想ありがとうございます

それでは、いきまーす

## 姫路と根本と奪われた手紙

教室の片付けには思った以上に時間がかかった。被害を受けたのは、主に俺と姫路。まあ主戦力だからな。俺たちは。それにしても、俺のカバンを使えなくなるくらいまでボロボロにするのはひどいと思うぞ。これじゃあ治せねえじゃねえか！ 姫路にはシャ―ペン折るくらいしかしてなかったくせに。なんだ！ 嫉妬か！？

とまあ俺たちが片付けている間に、四時になり、俺たちの戦いは明日に持ち越された。

．．．．．はずだった。

なにやらおかしい行動をしているＣクラスに条約交渉に行ったことで事態は一変する。

Ｃクラスの代表が根本の野郎と手を組んでいたのは誤算だった。あつという間に協定は破綻。戦争は続行。どうにか一日を切り抜けはしたが、その代償は大きいものに見える。

「静かにしなさい！豚ども！」

まあ、今その分の作戦を実行しているわけだが。

秀吉が姉を真似てＣクラスを挑発し、Ｆクラスに意識をそらす。つてか、秀吉の姉さんはこんなに怖いもんなのか？

このような雄二の機転で戦死者こそ少なくて済んだが、一つ、気になることがある。

それは姫路だ。

一夜明けた今日、なんだか様子がおかしい。疲れているというよりは戦いに身が入っていない。なにか他のことに意識がいつているようにも見える。

「戦死者は補習ー！」

また一人、補習室送りにする。こいつらも根本の手駒。そんなやつらに容赦もなにもない。

「ん？」

「どうしたの健吾」

ふと見たことのあるシルエットが目のはしに映る。姫路だ。なにか根本と話している。

手には一枚の封筒。．．．．．あれは！

「あれ．．．．．」

明久も気づいたようだ。あれは姫路が明久を誘った焼肉のチケット。昨日教室を荒らしたときに盗んだんだろう。まさかあいつ、これが目的で．．．．．！

「おい、明久。行くぞ！」

姫路がどうにかできる状況じゃない。俺と明久ならついでに根本を――

「待つて！」

明久が小声で俺を止める。

「どうしたんだよ」

「僕たちは今出ていけない。出て行っちゃいけないよ」

「なんでだよ」

「姫路さんを傷つけることになる」

「は？」



明久が嘘をついているようには見えない。

もしかしたらあのチケットは姫路の大切なもので明久以外には知られたくないのかもしれない。

そんなものを盗み、根本はそれをネタに脅してるわけだ。つくづく神経が腐ってるな。

「わかったよ」

「健吾」

「多分今同じこと考えてんだろ？　なら行こうぜ」

「うん。でも待って」

明久がゆっくり、遠くから姫路を呼ぶ。いかにも姫路がいたのだけを気づいて声をかけた風だ。

「吉井くん!？」

「姫路さん、朝から体調よくなさそうだし、僕と健吾に任せて休んで」

「でも……」

「いいから。俺の学力はお前並だぞ。なめんな」

「は、はい」

姫路がかけていく。根本は逃げたようだ。

根本。俺の動きも止めなかったこと、後悔させてやる。今の俺は、機嫌が悪いからな。

根本は絶対に俺たちが……

「ぶっ潰す」

「で、なんだ？ 二人して。脱走ならチヨキでしばくぞ」

開口一番、おっかないことを言われる。俺たちが話しているのは我らが代表の雄二だ。

別に脱走目的ではない。

「姫路さんに戦争に参加させないで欲しい」

「はあ？」

意味がわからないのも無理はない。姫路が戦争に参加しないこと自体、負けにいくようなものだからな。

雄二は最初、冗談でも聞いているような顔をしていたが、真剣な俺たちを見て、すぐに真面目になる。こういう察しのいいところはこいつの長所だな。

「別にいいが……。その代わり姫路の仕事をお前らでやれ」

「失敗したら……」

「言わなくちゃわからねえか？」

雄二が威圧感たっぷりで俺たちを見る。それくらい、失敗は許されないのだろう。

「根本に攻撃を仕掛ける。できるな？」

「任せろ！！」

意気揚々と教室を出る。もしこれで俺たちが負けたら姫路は自分を責めるに違いない。そんな後味の悪いこと、させつかよ！

「本当にいいんですね？」

「はい。健吾には兄としての威厳を見せなきゃいけないですから」

「俺の理由は言わないでおきたいです」

ただの殺意だし。

「いいでしょう。許可します」

「サモン試験召喚」

俺と明久の召喚獣が現れる。これはケン力ではなくれっきとした作戦だ。

「よし、いくぞ明久！」「急成長」

俺の掛け声で召喚獣がでくなる。これが俺の腕輪の能力。自分の召喚獣を成長させて戦う。一回で消費点数は二百点。まあその分効果は長いし、本物の小学生サイズまでにはなるからかなりでかい。でもなんで小学生サイズなんだろうか。

「か、可愛いいい」

教師が俺の召喚獣を見る。こいつは俺がこの前職員室に連れていかれた時、人一倍俺に興味を持っていたやつだ。これならどうにか気を引ける。

「おらあああああ」

すぐ近くでドスンと音になる。明久の召喚獣が壁を壊す音だ。しかし教師はそんなものには気づかない。というか俺の召喚獣しか見てない。なんか身の危険が……

「ドスン！ ドスン」

明久の召喚獣が壁を壊すたび、明久の拳からは血が流れる。

「ドスツ、ドスツ」

明久の額に冷や汗が滲み、足元もフラフラとし始めた。

「一旦戻るぞ」

「なんだ？ 逃げるのか」

雄二からの合図が聞こえる。しかし明久は徐々に力が弱くなっている。

「おい、明久？」

「……………」

返事がない。恐らく全てがギリギリの状態なんだろう。

「ガスッ」

「へっ？」

俺の拳を壁に叩きつける。もちろん召喚獣は使えないから素手で。でもおかげで明久も正気にもどったようだ。

「健……………吾？」

「いいから、召喚獣を動かせ。俺の力がじゃあ対して力になれないからな」

壁に当たった俺の拳から出た血が、下のほうに流れていく。

「わかった。うおりゃああああ」

「バゴンー」

大きな音とともに壁が崩れ去る。根元はそんな俺たちを見て、目を丸くしていた。

「おつす、性格の悪い外道野郎」

「それではとりあえず」

「くたばれ！ 根本 恭二いいい！」

「．．．．．たくつ、遅えんだよ。バカ二人」

．．．．．こうして俺たちの対Bクラスの戦争は、Fクラスの勝利として終わった。

姫路と根本と奪われた手紙（後書き）

いやはや、やっと終わったよ根本編。

今月までにはAクラス編に行きたいんだけどなあ。

いけるかなあ

俺と客と根本への復讐（前書き）

どもどもー

てなわけで早速始まりです

## 俺と客と根本への復讐

根本を倒した俺たちは、交渉の為Bクラスに残っていた。

「俺からの条件は今からAクラスに言って試験召喚戦争の準備はできていると宣言してこい。あくまでも宣言だけだぞ。宣戦布告はするな」

「それだけか？」

根本は雄二がもつと要求するもんだと思っていたんだろう。おずおずと聞いていた。

たくつ、ついさっきまでの態度は一体なんだったんだよ。

「俺からはな」

雄二が明久を見る。

「僕からの条件。それはこれを着てもらうことだ！」

明久がどこからか女子の制服を取り出す。別に女装させなくても制服は手に入るんじゃないか？

「あとは俺だな。ってもなあ、特にはなあ」

「え？　なんで？　だいぶ恨んでると思ってたけど」

「ああ。だけどさっき思いつきリストレスは発散したしな」

そもそも女装するっただけで充分な罰ゲームになってるし。俺のイライラをぶつけるとなると、こいつをボコボコにしなくちゃいけない。それはそれで問題だろう。



「じゃあ壊されたものは？ 弁償とか」  
「.....」

明久の言葉で気がつく。確かにボコボコはだめだが.....。  
あるじゃねえか。てっとり早い復讐が。

「そうだったなあ。どうすっかなあ」  
「べ、弁償はする！」

根本が叫ぶ。なんだよ、学園長にでも言うと思ったか？

「弁償なんてなあ、もう遅いんだよ。いや、お前が今更なにをしと  
ころでもう遅い。だから.....」

根本のアホ野郎に視線を向ける。

「お前の女装姿写真集でも作らせてもらおうかな」  
「は？」  
「ちようどいい。お前がくれたこのカバン。返すよ。女装写真だけ  
じゃつまらねえだろ」

根本が無言で首を降っている。そういえばこいつはどうやってランドセルなんか手に入れたんだろう。

「そ、それだけは勘弁してくれ！」  
「いいのかあ？ 断わって。全ての条件さえ飲めば、教室は取り替  
えないのに」

これは雄二の策略だ。目指すはAクラス。他の組は手駒くらいにし

か思っ てないらしい。

「まかせろ！ 俺たちが絶対にやらせる！」

「おう、強制だ！」

他の奴らが声をあげる。Bクラスのやつらはいいやつばかりだなあ。代表は修復不可なくらいに腐ってるけど。

「じゃあ、よろしく」

雄二について教室から出て行く。

「あれ、見ないのか？」

「「誰が見るか、んな気持ち悪いもん」「」

俺たちの声がピツタリ重なる。そんなもの見たら夢に出るっつの。

「その代わり、優秀なカメラマンを置いていくからな」  
「.....不本意」

ムツツリー二が不機嫌そうにカメラマンを持っている。こんな姿始めて見たかもしれない。いつもなら撮る気満々なのに。

「んじゃ、よろしくな」

「ムツツリー二も頼んだぞ」

「可愛くしてあげてね」

「それは無理。土台が腐ってるから」

去り際、そんな声が聞こえた気がした。根本、本当に人望はあったのかなあ.....。

交渉後、教室に戻る。そして扉を開ける。

「遅かったじゃない健吾。お客さんがー」

ーспанツー

勢いよく扉を閉める。今見たことは忘れよう。うん、そうしよう。

「け、健吾。今教室にものすごいカッコいい人が……………」

「なに言ってるんだ明久。そんなやつFクラスにいるもんか。あつ、俺先に帰るな」

そう言っで本気で走る。

「待て、カバンはどうした」

雄二に捕まえられた。

「い、いや。ボロボロだったし」

「じゃあ教科書は」

「明日でいいかなと」

「お前、なんか怪しいな。明久、さっさと扉を開ける」

「うん」

「あつ、ちよつ！」

明久が軽快に扉を開ける。ま、まずは顔を隠して……………それで……………

「健吾おー」

なんだかでかいのが飛び掛かってくる。雄二につかまれているから、逃げようにも逃げられない。

「健吾．．．．．？ 知り合いの人？」

明久の苦笑いが妙に悲しい。

「違う。変質者じゃないか？」

「健吾！ 兄になんてことを言うのです！」

「知らないことを言うなああああ！！」

「えっ、お兄さんのの？」

「ま、まあな。つてことで迎えがきたから帰るな！ みんなまた明日！！ 行くよ爽兄。」

カバンを持って急いで立ち去る。これ以上爽兄がここにいたら色々危うい。急いで連れて帰らなくては。

「け、健吾。ちょっと待って下さい！ 僕はこのクラスの方々にお話が．．．．．」

「それは今度な。今は忙しいんだよ」

急いで爽兄を引っ張っていく。

「おい健吾。別に今は暇だから平気だぞ」

雄二が笑みを浮かべながら俺を見る。この野郎、おもしろそうとか考えてるな。

「では、そうしましょう。僕は榊田 爽吾と申します。健吾の兄です」

「吉井 明久です」

「坂本 雄二です」

「．．．．．土屋 康太」

「木下 秀吉じゃ。これでも男じゃぞ」

「姫路 瑞希です」

「島田 美波です」

いつのまにか教室にいた爽兄の挨拶に合わせて、他の奴らも挨拶をする。

にしても姫路たちはすげえな。俺から見ても爽兄はかっこいい。爽兄と話す時の女子たちは目をみんなハートにするのに。もしかしてこの二人．．．．．

男じゃなくて女が好きとか？

「美波ちゃん、なんだか変な勘違いをされている気がします」

「偶然ね。ウチもよ」

なにか姫路たちが小声で言っていた。

「健吾、健吾のお兄さんうちの制服着てるよね？ ここの学生だったの？」

「いえ、違います。転校してきたんです」

やっぱりか。

「この時期に転校ですか？」

「どうしてじゃ？」

「健吾が心配だったからです」

「心配？」

「健吾はこんな外見ですから、いじめられないか心配で……。  
。なのに一人暮らしなんて……。」

ん？この流れつてもしかして悪いの俺になってる？

「で、発信機が壊れたので約束通り転校してきたわけです」

「「「発信機！？」「」」」

どうしてこう、すぐペラペラ話すんだろうか。

「はい。カバンに筆箱に……健吾の持ち物全てにつけてあります」

笑顔で言う爽兄を見てみんなの視線は俺に向けられる。

「い、言つとくけど、俺は嫌だったんだからな。ただそれが外れたことが分ければ爽兄が転校してくるって言うから……。」

それだけは嫌だったのに根本の野郎！！

「てことは三年生ですか？もしかしてAクラス？」

明久がそんなことを言う。まあ兄つて言われてあんな顔してりゃあ  
そうも思えるけど。

「いえ、二年Fクラス。ここです」

「「「ええええええええ！！」「」」」

それが爽兄の実力です。

「えっ、双子とか？」

「いえ、一歳上ですよ」

「じゃあわざと？」

「いえ、実際三年生にはいるはずでした」

「ならなんで？」

「転校前の学校からもう一度二年生にと、連絡がきたらしくて」

そう、爽兄は頭が悪い。もしかしたら明久も勝てるんじゃないか？

「と、いうことですので、これからよろしくお願いします。どうぞ爽吾とお呼びください」

こうして力にならないやつが一人増えた。というかこれで平気なのかな？ 対Aクラス。

## 俺と客と根本への復讐（後書き）

ノロノロしているうちにもうすぐハロウィンも終わってしまう!!

Aクラス編急いで終わらせようってことで更新です

一日に何個も更新したいけどできない

ああ、自分の容量の悪さが恨めしい



## 人物紹介2 & バカテスト2 (前書き)

新キャラの紹介です

## 人物紹介2 & バカテスト2

榊田 爽吾（18）

健吾の兄。めちゃくちゃ美形。のくせにめちゃくちゃバカ。  
健吾が大好きないわゆるブラコン

召喚獣は武器を持っていない丸腰状態

腕輪の能力は一生でないんじゃないですかねww

得意な教科 音楽

苦手な教科 数学

くバカテストく

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい

「光は波であって（ ）である」

姫路 瑞樹の答え

「粒子」

教師のコメント

「よくできました」

榊田 爽吾の答え

「真秘的」

教師のコメント

「非常に素直でいいと思いますが、  
「真秘的」ではなく「神秘的」です」

吉井 明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント

「先生もRPGは好きです」

坂本 雄二

「いけ！」

土屋 康太の答え

「必殺奥義！」

榊田 健吾の答え

「サングートルネードオオオ！！」

教師のコメント

「しかし攻撃は外れた」

坂本・土屋・榊田のコメント

「「「ちくしょおおー！！」」」

教師のコメント

「テストで遊ばないでください」

〈テスト返却後の感想〉

瑞樹「みなさん、ゲームにはまっているんですか？」

明久「うん。ちよつとRPGにね」

雄二「明久に借りたんだが、俺たちがはまっちまってな」

康太「．．．．．おかげで寝不足」

爽吾「そう言えば健吾もやってましたね」

健吾「おもしろいよ。今度やってみる」

爽吾「いえ、昨日少し借りたので平気です」

健吾「えっ．．．．．？」

爽吾「安心してください。ちゃんとセーブしましたよ」

健吾「えっ．．．．．。ち、ちよつと先に帰る」

爽吾「なんですかね？ あんなに焦って」

明久「そういえばあのゲーム。セーブできる場所が一つだよね」

雄二・康太「健吾．．．．．」

## 人物紹介2 & バカテスト2（後書き）

今見直すと、健吾も爽吾もややこしいですね。

気づくのが遅かったOrz

バカと俺たちと下剋上!?

とうとうAクラスとの戦いがやってきた。

代表戦で多く勝ったほうが勝ちという簡単なルールだ。まあこれなら俺たちにも多少有利な点はある。

それにしても、あの霧島 翔子と雄二が幼馴染とはな。それにも驚いたが、その後のクラスの奴らのほうが驚いた。まさか容赦なく雄二を殺しにかかるとは。本当に怖いクラスだ。

「健吾。なにをぼつとしているんですか？」

「えっ!?! いやなんでも」

「ほら、秀吉くんですよ」

第一回は木下姉VS秀吉。成績に差はあっても、双子だからこそ知っている弱点があるはずだ。それを使えば……………。

「って、あれ？」

表示された点数? を見る。

「生命活動 木下 優子 WIN

木下 秀吉 DEAD」

「秀吉iiiiiii」

健闘する姿も見られないまま、秀吉は星になっていた。

「代わりに出る方は……………」

「僕が出ます」

「爽兄！？」

隣で爽兄が手をあげていた。

「僕らのクラスの勝利のためです。戦いましょう」

爽兄が戦わないことが俺たちの勝利につながるんだけど……  
。ってそんなこと思ってる場合じゃない。早く止めないと！

「爽兄！ いいから！ 頼むからでないで！」

「健吾、平気です。僕だって勉強してきたんです」

「じゃあ、召喚してみてよ。雄二たちに決めてもらおう」

「望むところです。試験<sup>サモン</sup>召喚」

幾何学模様が表示され、出てきたのは――

「数学 榊田 爽吾 11点」

「二桁取れたんです」

丸腰の爽兄の召喚獣と、自身満々の爽兄。そして想像を絶する点数だった。

「どうしよう。僕の方が高いよこれ」

「点数悪すぎると、武器すら持てないんだな」

「すまん……」

謝ることしかできない。

「どうですか」

「すんません。ここは爽吾さんより健吾に出てもらったほうが……」

「そうですか」

「というわけで俺がいきます」

「か、かわ・・・」

「なんでもないわ。始めましょう。試験召喚」  
サモン

「試験召喚」

「数学 木下 優子 362点」

「なかなかね。あなた、本当にFクラス？」

「まあいいわ。こちらから行くわよ！」

95



「まだまだ！ これに勝てば．．．．．。弟がもう一人．．．．．」

なんだか木下姉のつぶやうた言葉に寒気を覚える。弟がもう一人つて．．．．．なに？ 俺、負けたらなにされんの！？

「まだ死ぬ訳にはいかなええええ！！」

快心の一撃を召喚獣に食らわせる。大幅に点数を削ったあとでラストの一撃。

「木下 優子 0点」

まあ、こんなもんだろ。それにしても木下姉は妙に俺をなごりおしそうに見ていた気がしたが．．．．．気のせいということにしておこう。

俺の勝利で、Fクラスは勝ち星をあげたものの、次の明久により、同点となる。あんな瞬殺、描写するまでもない。

次はムツリー二の番、これは当然勝ち。同じように保健が得意な奴が敵だったのにはひやひやしたが、まさか腕輪を使うとは。

そして今は姫路のわけだが．．．．．。

「いきます。 サモン 試験召喚」

何故か爽兄が出ている。というのも、始まる前、姫路が突然倒れ、急遽爽兄が出来ることになった。相手は学年次席の久保 利光。当然、爽兄に勝てる要素はない。

「なにか科目の指定はありますか？」

「そうですね。僕は向こうの方に合わせます。歳上ですし」

久保は恐らく負ける気はない。俺もそうだと思う。

「では、家庭科にしましょう。得意科目ですし」  
「は？」

俺の口からは間抜けな声が出てしまう。今爽兄なんて言った？ 家庭科が得意科目？

「そ、爽兄．．．．．？」

俺が言うと爽兄はまかせろ！といった感じの笑みを向ける。

「そ、爽兄！ 今すぐ科目をー」

「「試験召喚」」  
サモン

二人が同時に召喚する。もうダメだ。爽兄は自分が思っているよりも遥かに家庭科は苦手なんだから。

「家庭科 久保 利光 250点

あれ？久保も意外と点が低い。久保、焦ってるな。家庭科は苦手なのか。

榊田 爽吾 30点」

爽兄もほうが遥かに下だけど。あつ、久保驚いてる。あいつもあんな顔するんだな。

「ち、ちょ、健吾？爽吾さんは家庭科得意なんじゃ……………」

「自称だよ。本当はめちゃくちゃだめ」

「腕前は？」

「姫路くらい」

「「それは……………」」

みんながうつむいていた。島田は姫路の看病でいないし。今この場にいるやつらは同じ苦しみをしるやつらだ。

「で、でも、点はいいいんだね」

「まあ、家庭科は好きらしいからな。裁縫ならできるし」  
「なるほど、実技（料理）以外は問題ないわけだ」

雄二の察しが良くて助かる。とか話している間に爽兄は負けて帰ってきた。瞬殺か。

「すいません」

「気にしないでください。俺が勝てばいいんすから」

「本当に勝てるの？」

「おう！」

雄二のこの言葉は、強がりではないようだ。さて。次は霧島と雄二の一騎打ち。頼んだぞ雄二！！

小学生レベルの問題。こんなのは霧島にとって簡単なこと。でも一問、あの問題さえ出れば逆転はできる。

「坂本くんには悪いことをしました。私が倒れたりしなければ……………」

気づくと姫路が立っていた。どうやら具合は良くなったらしい。

「平気だよ姫路さん。あの問題さえれば」

「そうですね。坂本くん、がんばってください」

どんどん問題が表示されていく。霧島はその問題を顔色も変えずに平然と解いていく。これでは満点をとってしまうかもしれない。

「あっ！」

「どうした？」

明久の視線の先をその場にいた全員が確認する。そこには大きなモニターに

「（ ）年　大化の改心」

「きたあああああ！」

「やりました！ やりましたよ美波ちゃん」

「やったわね。瑞樹」

「これで……」

「「「「Fクラスの勝利！！」」」」

全員が歓喜でわいた。と思っていたら一人だけそうっていないやつがいた。

「どうしたの爽兄」

爽兄は難しい顔をしままモニターを見ている。

「はたして本当に勝つことはできるのでしょうか？」

「大化の改心の問題はでたし、いけると思うよ」

「いえ。確かにそうです。そこで霧島さんは点を落とすかもしれない  
せん」

「うん」

「でも、坂本くんは満点を取れるのでしょうか」

「え．．．．．？」

雄二が満点を取れない？ これは小学校の問題。取れないわけが．．．。

「明久、お前何問解けた」

「うーん。１２問くらいかな」

「島田は？」

「１５問ね」

「姫路は？」

「９０問は解けました」

「ムッツリー二は？」

「．．．．．３０問程度」

さつと血の気が引く。爽兄が何問解けたかなんて大体予想はつく。  
俺たちは重要な勘違いをしていたのかもしれない。いくら神童と言  
われていたって、それは昔の話。たしかに今満点が取れるとは考え  
にくい。

「やめつ。 結果発表です」

モニターに全員の視線があつまる。

「Ａクラス 霧島 翔子 ９７点」

V S

「Fクラス 坂本 雄二 53点」

みんなの机がみかん箱になった。

バカと俺たちと下剋上！？（後書き）

どうにかAクラス戦終わったあああ！

途中から焦りからが無理やりになってしまい謝ります。

すいません

でも次はちゃんとしますよ！

ちなみに次あたりでこの章もおわり新章に

突入です！

## バカなクラスの後日談（前書き）

今回は少々短いです。



## バカなクラスの後日談

「さて。明久。こいつはどう処分する」

「そうだね。ここは．．．．．」

「潰れるおおお！！」

雄二は強いがいくつも机を落とせばくたばるはずだ。

「なんだよあの点数！ 自信ありげだったじゃねえか！」

「それに関しては言い訳もできない」

「期待させといて！ このバカ雄二！」

机を持ち上げ雄二に目標を定める。

「．．．雄二」

放り投げようと力をこめた腕をすぐ下ろす。霧島に当たったら大惨事だ。

「約束。命令を一つ聞いて」

「なんだよ」

「わたしと付き合って」

「お前、まだ諦めてなかったのか．．．．．」

一瞬わけがわからなくなる。これは告白ってやつか？霧島が雄二を？ 幼なじみでそんなのどこのラブコメだよ！

「わたしはずっと雄二のことが好き」

「はあ」

なんだ？ この小っ恥ずかしい展開は？ とうか、なんでみんなあんな平然としてられるんだよ！

「霧島さん、積極的ね」

「見習いたいです」

女子なんか、尊敬の眼差しで見てるし。明久たちは普通に見てるし。ああ、なんだ？ 俺がおかしいのか？

「諦めろ」

「嫌だ。早速明日デートに行く」

デ、デートって．．．．。もうだめだ。この空気耐えきれん。

「かか帰らせていただきます」

「健吾どうしたの！？ 顔真っ赤」

「きき気にすんな。じゃあな」

「すいません。健吾が恋愛的な空気が苦手なの忘れてました。僕も失礼します」

急いで外へ飛び出す。ああ、恥ずかしい。告白なんて人の目の前でするなよ。

あのクラスでこれからもやってくんだよな。女子少ないから問題ないと思うけど。

なんか不安になってきた。

## バカなクラスの後日談（後書き）

次回からは新章突入！

．．．．．の予定です

### バカテスト3 (前書き)

バカテストはじまりはじまりー

### バカテスト3

学園祭で出し物を決めるアンケートに答えなさい

「あなたが一番欲しいものはなんですか？」

姫路 瑞希の答え

「みんなとの思い出」

教師のコメント

「みんなとの思い出になるような出し物もいいかもしれませんね」

榊田 爽吾の答え

「クラスみなさんと打ち解ける場」

教師のコメント

「途中からの転校でみんなより年上ですから、そういう時間も必要ですね」

吉井 明久の答え

「カロリー」

教師のコメント

「この解答に君の生命の危機が感じられます」

榊田 健吾の答え

「背が伸びる薬」

教師のコメント

「この解答からあなたの悲しみが伝わってきました」

・・・テスト返却後の感想・・・

明久「この文化祭でみんなと仲良くなれるといいですね、爽吾さん」  
瑞希「そうですね」

爽吾「はい。ありがとうございます」

健吾「・・・・・・・・」

明久「健吾、なに泣いてるの？」

健吾「お前には分からねえよバカ」

## バカテスト3（後書き）

次回から新章突入です

## バカと春と文化祭（前書き）

文化祭編突入です！

それでははじまりです



## バカと春と文化祭

まだ暖かな春の陽気。それもそのはず、今はまだ一学期。試験召喚戦争を終えた俺たちは、少しの平穏な日々を送っていた。が、今はまったく平穏とは言えない。

「で、クラスの出し物にするんだ？」

黒板の前に立って、クラスのやつらを見る。  
うん、ろくないけんが出なさそうだ。

「．．．．．写真館」

「コスプレ喫茶！」

「姫路さん喫茶！」

「いや、ここは健ちゃん喫茶だろ」

「待て！ 秀吉喫茶も捨てがたい」

早速収集がつかなくなっている。お前らに期待はしてなかったけどな。

俺たちは今、来る文化祭の話し合いの最中だ。一学期に文化祭というのはどうにも府に落ちん。どうせだったら夏休み明けとかにしてくれよな。

「明久、書けてるか？」

明久が書記なんてものができるかなんて期待すらしていないが、いちおう確認で黒板を見る。

「コスプレ写真喫茶（秀吉・姫路さん・健吾）」

「いやいや！！　まとめすぎだろっ！！」  
「ほえ？」

確かに明久の頭で全員の意見がまとまるなんて思っていなかった。  
だが、普通意見をまとめるか？　ていうかコスプレ写真喫茶ってど  
んなのだよ！！

「明久の頭が追いつかない！　一人ずつ意見を言ってくれ」  
「健t「しゃs「cos「・・・レ喫茶！」

さっきよりもひどくなったな。

「明久、今は書かなくていいぞ」

「えっ、そうなの？」

「そもそも日本語にもなっていないだろ・・・う？」

黒板をまた見る。

「健吾コスプレコレクション喫茶」

・・・気がついたら俺限定になっていた。

「静かにしろって！　おい！」

騒ぎは収まらない。このままじゃ俺はコスプレ写真が流出するとい  
う一大事になってしまう。くそっ、奥の手だ！

「うっ。　僕の話し聞いてよお。　ひくっ。　うええ」

あえて見えるように教卓の横で座り込む。　ちなみに涙は目薬だ。　秘  
技！　瞬間目薬さし！

「ごめんね健吾。静かにするから。ね？泣き止んで？」

「ほんと？」

「本当よ。ね？」

島田の鋭い目がクラス中に向けられる。一瞬でクラスが静かになった。

「あつ、いいことを考えましたよ」

「爽悟さん？」

「兄弟喫茶でいいじゃないですか。健吾もお役に立ってますし」

爽兄のバカ！！なにを言ってくれちゃってるんだーって

「兄弟喫茶」

明久も書かんでいいー！！

「それじゃあ多数決で決めるわよ。兄弟喫茶がいい人ー」

クラスも連中は今回で一番の団結力を見せていた。

## バカと春と文化祭（後書き）

いろんな都合上により文化祭が早い設定です。  
というかすでに原作無視状態ww

## 兄と弟と役割分担（前書き）

では始まりです

## 兄と弟と役割分担

「あとは役割分担か。キッチンとホールでいいよな」

渋々、進行を進める。

「．．．．．キッチンが俺にまかせろ」

「お前、料理できるのか？」

「紳士の嗜み」

何時の間にか目の前に立っていたムツリ二が言う。紳士って．．．。お前、行動がすでに紳士じゃないんだけど。

「お料理でしたらわたしもお手伝いをー」

「いや、いい！」「」

姫路、なんてことを言い始めるんだ。俺たちは胃が特殊だから平気だが、凡人は食ったら即死だぞ。

「でも兄弟喫茶ですからわたしたちは．．．．．」

なんとという凡ミス！ 兄弟、とついている時点で店員は男のみ。ぐああ、なぜ気づかなかった。

「簡単なことです。お二人とも姉か妹になればいいのですよ」

「？？」

爽兄の言葉に二人は？マークを浮かべる。確かに兄弟に限らず姉妹にはできる。そうすれば被害者はいなくなるな。

「そ、それがいいよ姫路さん！ お姉さんとかいいかもね」  
「そ、そうですね？ それじゃあ……………」

姫路がその気になっている。ナイスだ明久！

「ア、アキ！ ウチは……………」

「美波もお姉さんかな？」

「そ、そう？ がんばりましょう、瑞希」  
「は、はい」

二人がやる気になっている。心変わりが早いなあ。もしかしてもとからやりたかったんじゃないのか？

「明久、それだと妹もいないとおかしくないか？」

「平気だよ。秀吉がいるじゃないか」

「明久！？ それはおかしくないかのう！」

「ああ。平気だな」

「健吾まで！！」

秀吉なら妹に限らなくても他も演じられるだろう。

「じゃあ、ホールは明久、姫路、島田、秀吉、爽兄、雄二あたりでいいよな」

「えっ、健吾は？」

「俺はキッチンだよ」

面倒だし。

「そんな！ 健吾はホールだよ！ ねっ、雄二」

「…………ん？ ああ。どうでもいいんじゃないか？」

明久の言葉で、ちゃぶ台に突っ伏していた雄二が顔を起こす。あいつはこういう行事に興味がないだろうが、本当にやる気ないんだな。

「健吾、いいんですよ無理しなくて」

「爽兄……………」

爽兄だけが俺の気持ちをわかってきている。さすが俺の兄ちゃん。

「健吾は僕以外の弟になるのが嫌なんですな」

前言撤回。なんかすっごい勘違いされてるし。

「明久、俺、やるよホール」

「本当？ よしっ、決定！」

きつと俺が折れないと更にややこしくなれると思う。まあ姫路たちに客が行って、俺は楽できるだろ。

「姫路、島田、俺、明久、雄二、爽兄、秀吉以外はキッチンその他を頼む」

「オッケー！ 我が弟よ！！」

なんでこいちらはこんなにテンションが高いんだろう。

とりあえず姫路と島田が姉。明久と俺が弟。秀吉がいろいろ。爽兄と雄二が兄。

で決まったが、雄二はちゃんとやってくれんのかな？

ふと爆睡中のクラスメイトを見る。あいつがいるとこないじゃあ、クラスの手気も変わってくるからな。どうにか動かせられたら



いっしょ。

## 兄と弟と役割分担（後書き）

テストが近づいたり、ネットがつながらなく

なったりで「不幸だー！！」って叫んでま

した

今はネット繋がりますが、

テストが近いー！

．．．．．はあ、ため息しか出ねえや

バカと転校と丸秘作戦（前書き）

どもども

さっそくはじまりです

## バカと転校と丸秘作戦

役割も決まり、自由時間。

っても特にやることもねえし。暇だ。

「ねえ、健吾、アキ」

「ん？ どうした？」

「なにかあったの？」

島田が真剣な顔で俺たちに話しかける。

「その……………相談んだけど」

島田が相談なんて珍しい。

「どうにか坂本を文化祭に引っ張りだせないかな」

「雄二を？」

すぐ近くで爆睡している悪友を見る。この手のことにはとことん興味がないからな。こいつ。

「難しいかもな」

「でも、アキと健吾ならできるでしょ？」

「なんでだよ」

「だって……………」

島田が爆睡中の雄二を見る。そして俺と明久を見る。

「アキと坂本がその……………健吾を育ててるんでしょ？」

「「は？」」

育てるって、俺はこいつらと同じ歳だし。  
てかどこも情報だよ！ それ。

「島田。俺は無関係だ。任せるなら明久にしてくれ」

「健吾！？ 別に僕も雄二となにもないんだけど」

「ところで島田、突然そんなことを言い出してどうしたんだよ」

「ちよっ、僕無視？」

明久がなにか言っているが、無視の方向でいこう。

「坂本がいないと文化祭が失敗する気がして」

「別にいいんじゃないか？ それも思い出し。たいしたことない  
だろ」

「それがあるのよ」

島田がうつむく。まさか、文化祭が失敗したらなにか災いがー！。

「美波、どういうこと？」

「本人には言わないでって言われてるんだけど。内緒よ？」

なんだか深刻な話らしい。空気を感じ取った秀吉やムッツリーニ。  
爽兄までやってきた。

「瑞希が転校しちゃうかもしれないの」

姫路が転校？ 確かにこのクラス的环境は姫路にはよくないが、転  
校するほどか？

ただそれだけ頭の硬い親父だよ。

「なあ、明久はいつたいどう思．．．．．!?」

明久がなにかブツブツ言いながら、虚空を見つめている。  
なんだかんだこいつは姫路と仲がいいからな。シヨックなんだろう。

「ねえ、健吾」

「ん? どうした」

明久の目が虚空を見つめている。

「僕がモヒカンになっても、弟として接してくれるかい?」

「転校から一体どうすればそこにたどり着けるんだ!?」

いかん、明久が壊れ始めている。

たしか斜め45°を叩けば大抵は直るよな。

「うりゃっ」

「だっ、」

「明久は電子機器ではないぞい!」

「でも直ったみたいですね」

「．．．．．構造が単純」

「反論もできないわ」

明久がきょとんと俺たちを見ている。  
どうやら正気には戻ったようだ。

「で、姫路が転校って、どうしてだよ」

「Fクラスの原因の一つよ。瑞希、体が弱いから」

たしかにこんなボロボロの教室じゃあ、体にいいとは言えない。  
文化祭で成功すれば、教室のことだってどうにかできるかもしれないな。

「姫路と競う相手もおらぬからのう。それもあるのじゃろう」

俺だけでは足りないしな。あいつがAクラスにさえいればいいんだが。

「ア、アキは瑞希が転校したら嫌よね？」

「なに言ってるのさ。姫路さんじゃなくても、このクラスの誰がいなくなってもいやだよ」

「そうよね」

島田がどこかほっとした顔をしている。なんだ？ 島田ももしかして転校しそうになったとか？

「でも雄二くんをどうやってやる気にさせまよう」

爽兄の言葉で気がつく。あいつは一回頼んだくらいで協力してくれるようなやつじゃない。さて、どうすっかな。

「むにゃ…………。待て、翔子」

雄二の寝言か。てか、なんで霧島の夢？

「ま、待てって！ お前、なにする気だ！ それをしまえ！ うぎやああ」

いったいどんな夢見てるんだ？ こいつは。  
ただまあ、こいつを動かす作戦は考えついた。

「健吾」

「ああ、言われなくてもわかってるよ」

明久と互いに目配せをする。

どうやら明久と俺の考えは一緒らしい。

「お、おぬしらなにをする気じゃ？」

「ちよつと雄二を動かしにいくんだよ」

「あんたたち、すつごく悪い顔してるんだけど」

「気のせいだよ。さつ、行こうか、健吾」

「ああ。じゃあ、お前たちはここで待機な」

明久と二人で教室を出て行く。

ちよつと助けを頼みに行かないとな。

Aクラスへ。



## バカと転校と丸秘作戦（後書き）

確実に原作スルーしてますね

まあきつとすぐに戻るでしょう

## バカと雄二と逃走劇（前書き）

どもども

んじゃはじまりです

## バカと雄二と逃走劇

明久と共にAクラスへ向かう。

理由は簡単。霧島に協力してもらったためだ。やっぱ、こういう時霧島は頼りになるよな。

「吉井、なにしてるの？」

「あつ、霧島さん。霧島さんを探してたんだよ」

「わたしを？」

霧島が首をかしげる。まあ俺たちが霧島に用があるなんて大抵はないからな。

「実はゆー」

「わかった。今行く」

「早っ！！」

霧島がずんずんとFクラスへ歩き始める。手にスタンガンみたいなものが見えるけど……………気のせいだよな。うん。

「雄二いる？」

「そこで眠って……………。いなくなっておるのう」

「霧島さんの声を聞いた瞬間、窓から飛び出して行ったわね」

確か雄二、爆睡してたよな。第六感でも働いてんのか？

「雄二、逃がさない」

「あつ、霧島！」

霧島が教室から出て行く。あいつがいらないんじゃない？あ計画が成り立たねえ。

「明久！ 計画変更だ！ このままいくぞ」  
「了解！」

教室から出て行く。あいつのことだ。行くところなんて思いつく。

「やつほ、雄二」

「やつぱり、ここにいると思ったぜ」

「.....」

「？ どうしたの雄二」

「なんか言えよ」

「お前ら、ここがどこだかわかってるのか？」

「やだなあ」

「当然だろ。ここはー」

「女子更衣室だろ（でしょ）？」

そう、俺たちは今女子更衣室の中にいる。当然、雄二も。ちなみに先にいたのは雄二であり、俺たちは雄二を追ってここまで来ただけだ。

「普通、こんなところで鉢合わせなんかしないと思うぞ」

雄二はなにを言ってるんだろう？ 同じ学校にいるんだから、鉢合わせだってするだろ。

「で、雄二。話があるんだけど」

「ここですか？」

「別に外出てもいいぞ？　霧島が追いかけてくるけど」  
「いや、ここでしょう」

雄二が話しがわかるやつで助かる。

「あのなー」

「あんたたち、こんなところでなにやってんのよ」

「「えっ？」」

声のするほうを振り返ると、秀吉が立っていた。

「秀吉？」

「あんなバカと一緒にしないでくれる？」

「木下さん！？」

秀吉と同じ苗字で、顔がそっくりなやつ……。

「木下　優子か！」

木下はため息をつく。

「ちよつと先生呼んでくるわ」

「ちよちよちよ木下さん！？　ちよつと待って」

「なんでよ？　覗き魔でしょ。あんたたち」

「誤解だよ！」

ここで教師と呼ばれると職員室直行はまぬがれないだろう。そうすればまたあの変態教師どもの餌食になるってことだ。とりあえずここから脱出できれば、逃げ切れる！

「ねえ、お姉ちゃん？」  
「はうっ！」

あれ、木下の動きが止まった。案外、ちよろいつつか、もしかしたら子供好きか？あつ、俺が子供に見えろとかそういうことではないからな。

「落ち着くのよ。優子。気にしちゃだめ気にしちゃ」

木下がなんかしきりに暗示をかけている。よくわからんが、今がチャンスか。

「それじゃあトンスラさせてもらっぜ」  
「あつ、ちよっ」

明久と雄二を連れて更衣室から飛び出す。木下は驚いた様子で俺たちを見たが、今更追いつけるはずがない。

「むっ、吉井に坂本に榊田。なにやってるんだ？」

「「「げっ、鉄人！」「」」

「西村先生！ そいつらは覗き魔です」

「なに！？」

「やべっ、逃げるぞ！ 明久、健吾」

「「おう」」

鉄人の反対方向に走る。くそっ、鉄人め。なんで更衣室近くなんか歩くんだよ。

「.....あつ。まさか鉄人、覗こうとしてたんじゃ.....」  
。

「榊田！ なにか勘違いをしてないか？」

「い、いや。まったく」

考え読めんのかよ。あの化物教師！

「よし、健吾！ 明久！ 行け！」

雄二が窓に向かって足場をつくる。これを土台に上の階に飛び移れ  
つてことだ。

「行くよ雄二」

「おう」

明久が跳ぶ。上の方から着地の音が聞こえたから無事に飛び乗れた  
んだろう。

「健吾！」

「わかった」

雄二に向かって走りはじめたその時、

「ふわっ」

急に体が宙にういた気がした。ついでに後ろの方にだれかに掴まれ  
ているような違和感。

「やっと捕まえたぞ。榊田」

「健吾！」

くそつ、鉄人に捕まった。これじゃあ簡単には逃げられねえ。

「雄二、俺は平気だ。先に行け！」  
「わかった」

雄二が上へ登って行く。あとは明久がなんとかしてくれるはずだ。今はここから逃げることを考えよう。まずは大きく息を吸う。そして――

「助けてー！ 変態教師に攫われるー！」  
「榊田！ お前なんてことを」

鉄人の手の力が緩む。今のうちに逃げよう。

「あつ、待て！」  
「西村先生！ なにやってるんですか？」  
「た、高橋先生？」  
「あんな子供を攫おうとするだなんて。お話があります。来てください」  
「い、いえ。榊田がー」  
「黙りなさい！」

鉄人が何人もの先生に連れていかれる。というか俺は子供じゃあないんだが。

まっ、逃げられたんだからよしとするか。  
たぶん、明久たちは教室に戻るだろう。ここらでだらだら歩くのは暇だし、先に戻ってるかな。



## バカと雄二と逃走劇（後書き）

最近、咳が止まりません。

この前なんて授業中に死にかけました。

きっと風邪じゃない！ だってバカだから！  
空気乾燥してますからね。

みなさんも気をつけてください。

俺と明久と姫路への思い（前書き）

はあ、サブタイトルがあまりにもあれだ。  
今回は恋愛色が強い！といいなあ

## 俺と明久と姫路への思い

俺は教室の扉の前で立ち止まっていた。

別に中に入ったら鉄人がいるんじゃないかと疑っているからではない。ただ――

「……………秘蔵、健吾の生写真」

「500円で買っわ！」

「1000円！」

「えーい、10000円だ！」

会話だけで嫌な予感しかない。

入っていてもなにも害はないだろう。ただどうにも入りづらい。というか今、島田も参加してなかったか？

「健吾？」

声がして振り返ると、明久と雄二がいた。

明久は顔面ボコボコだが、まあ気にしないでおう。

「無事だったんだね。鉄人が健吾を襲ってたって噂聞いたときは驚いたよ」

「まさか鉄人にそんな趣味があったとはな」

どうしよう。鉄人に会ったら謝ったほうがいいかもしれない。

「とにかく、入るぞ。これからの作戦会議をしなくちゃな」

どうやら、明久は無事、説得できたらしい。雄二は教室の扉を開け

た。

「……………明久の女装写真」

「10000円！」

「どうして僕の写真がオークションに出されてるの!？」

すでに対象が変わっていた。

明久、俺とお前は同志だぜ。

「どうやら無事、坂本さんの説得力終わったようですね」

「割りと早かったのう。雄二相手ならもっと手こずると思ったのじやが」

奏兄と秀吉が俺たちを見てやってくる。

「ああ、明久の大好きな誰かさんのためにな」

「ちよっ、雄二」

明久が急いで雄二の口を抑える。

「なるほど。そういうことですか」

奏兄が一人で納得している。秀吉はその隣でうなづいてるし。

ん？ この文化祭は姫路のために頑張るわけで。明久は大好きな誰かのために頑張ると。

これって、単純に考えるとー

「明久って、姫路のことす、もがっ」

明久に口を塞がれる。えっ、冗談半分だったのに。凶星か!？

(明久、凶星？)

(.....)

小声での問いに明久が無言で頷く。

教室出て話したほうがいい気がするんだが、明久のせいで動けない。

(さっきまで自覚はなかったんだけど、雄二が間違いないって)

いったいさっきなにがあったんだろう。

たぶん俺と別れたあとだよな。

ああ、鉄人に捕まらなければよかった。こんなおもしろいことを聞き逃すとは。

(俺が言ってきたてやろうか？)

(！ いいよ)

(なんで？ どうせお前に言う勇気ないだろ)

というか俺はお前が振られるところをみたい。

(.....から)

(ん？)

(そういうことは.....僕が言いたいから)

明久の顔が真っ赤だ。

なんつつか、こいつあんまこんな風に照れないからな。鼻血だすことはあっても。ちょっと珍しい。

って、ああ、俺まで照れてきた。やっぱり無理だこの空気！

「あもう、榊田くに吉井くん？ わたしがどうかしたんですか？

「

姫路の声が後ろから聞こえる。

近くにいなかったから平気だと思っていたらやっぱ聞こえてたか。

「す、好きになる人がたくさんいそうだねって言ってたんだよ。姫路さんには」

わあ、すごく苦しい言い訳だな。いくらなんでも気づかれるだろ。

「ふえ？ わたしを好きになる人がですか？」

あれ、そのまま続行！？ 姫路、怪しまないんだな。

「だって、家庭的だし。優しいし」

家庭的か。料理以外だったらできそうではあるよな。

「吉井くんは家庭的な人が好きなんですか？」

「そりゃあ、男ならみんなそうだよ」

心を胃袋で掴め！ っていうくらいだし。当たり前っちゃ当たり前か。

「そうですか。わかりました！」

姫路がめちゃくちゃ笑顔になった。

あつ、褒められたから喜んでるわけか。そりゃ嬉しくて笑顔にもなるわな。

とにかく、こうして雄二をやる気にさせる作戦は終了した。

この後、雄二は霧島に再び追いかけることになったが、それは俺には関係ない。

## 俺と明久と姫路への思い（後書き）

はい、今回は明久×瑞希をできるかぎり書いてみました。

実はこういうの書くの始めてでして。

うまくかけてたら嬉しいっす。

ところで、みなさんに質問なのですが、

実は健吾をいつたい誰とくつつけさせるか、全く考えておりません。  
明久×瑞希、雄二×翔子、ムッツリーニ×愛子は予定しております。

健吾のお相手は誰がいいっすかね？　というわけでそんなアンケートです

- ・ 木下 優子
- ・ 島田 美波
- ・ 清水 美春
- ・ 吉井 玲
- ・ 相手なし

辺りで考えています。誰がいいか、よければ答えていただけたとうれしいです。他にもぴったりのキャラがいるよ！　とかありましたら気軽に教えてください。

ついでに恋愛ネタを書くときのコツなどありましたら教えてくれるとありがたいです



俺と雄二と作戦会議（前書き）

中嶋さん、タイラントさん、神夜 晶さん  
感想ありがとうございます

今回はいつもよりもグダグダな文章の予感

## 俺と雄二と作戦会議

そんなこんなでただいま作戦会議中。当然、姫路はここにいない。明久の為に、パンケーキを作ると言っではりきって教室を出て行った。

まあ明久の自業自得だな。

「姫路の転校を阻止するために、三つすることがある」

雄二が指を三つ立てる。

「まずはFクラス自体の環境だ。少なくとも、姫路が安心して勉強できる場所だとわかってもらいたい」

「うぬ。最下層のクラスじゃからの。心配するじゃろ」

Fクラスってだけで悪い印象しかないからな。それをどうにかしないと。

「次に教室の環境だ。姫路の過ごしやすい環境にする必要がある。」

「こんなほこりっぽい場所じゃあ、姫路さんの体調も悪くなる一方だしね」

隙間風の入る教室で、元気でいろってほうが無理だろうな。

「最後にクラス内にライバルがいること。まあそれは健吾になるわけだが。とにかく姫路が学力向上を測れる環境にいることを両親に見せる」

「見せるって、どうするんですか？」

「これだ」

雄二がプリントを見せる。

カラフルな絵や文字が大きく書かれている。

「なにこれ？」

「文化祭に来たやつに試験召喚戦争を公開するらしい。これに誰かが健吾とコンビで出て欲しい。できれば決勝戦あたりにまで行ってほしい」

そうすりゃ、姫路が上を目指せる環境にいるってことをわからせることはできるか。

「でも誰が出んだよ。雄二か？」

「俺は出ねえよ。面倒くせえ」

「ウチも瑞希と出ることになってるわ。瑞希、優勝してお父さんを見返してやるって言ってたわよ」

「ムツッリー二と秀吉は勝利のためにいろいろしてもらっ予定だからな。開けといてくれ」

ってことは……。明久と爽兄か。

「雄二。俺、勝てる気がしない」

「健吾、平気だ。明久は盾になる」

「僕、フィードバックくるんだけど!？」

俺だって同じなんだから、お前が盾くらいにはなれよ。

「そして爽吾さんは……」

雄二の言葉にごくりと唾を飲む。

「お前と同じ血が流れている」

「同じ血が流れてても学力が同じとは限らねえんだよおお!!」

そんな奇跡があるんだったら秀吉はここにいねえよ！

まあ、どっちか二人って言うんだったら。

「雄二、俺爽兄と出るよ」

「健吾！」

「その代わり、今日から文化祭までみっちり俺と勉強だからね。爽兄」

文化祭まで日はない。徹夜で教えれば二桁くらいならいけるはず！

「健吾、明久。ちょっとついてきて欲しい場所があるんだが」

「雄二一人で行きなよ」

「お前だけで足り」パンケーキが焼けましたよ。みんなの分も焼いてきましたから」よしっ、行くぞ雄二！」

見えない。姫路も持っているパンケーキなんて見えないぞ。

雄二についていくのはただ雄二が一人でかわいそうだと思ったただけだ！

「坂本くんたち、どこか行くんですか？」

「ああ。明久は残るみたいだぞ」

「なに言ってるんだよ雄二。僕も行くよ」

明久の目が訴えている。置いていかないと。

「ってことだ。悪いな姫路。明久も連れてくぞ」

「あつ、はい」

あれ、雄二は明久を助けるなんて珍しいな。

とりあえず雄二についていく。教室から次々に散っていく戦友の断末魔が聞こえるが、聞こえないふりをしておこつ。

## 俺と雄二と作戦会議（後書き）

もうすぐ冬休みー！

というところで更新を早くしつつ、もう少し、しっかりとした文章を書けるようにがんばります！

って、もうすぐクリスマスか．．．．．

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8905w/>

---

バカとテストとショタ少年！？

2011年12月21日21時47分発行